

市民の目線にたつ史談会に

会長 久保 彰 三

城山の姿が目の前であって、私が毎日のようにてくてく歩いている番匠川原には、小さな石の野仏が草叢の中におわします。土手の斜面の二体は首がもげており、河川敷の中の一体は目鼻立ちは分らないが赤い帽子と衣服が着せ

られている。水が供えられ賽銭なども見かける。四季の移ろいを賞でつつ、この野仏を守ってきた人々の情念をあれこれ思い巡らせているうちに、身内のような気がして、心の中で手を合わせて通り過ぎるようになった。想いはさらに広がる。米水津の「おための泣き石」蒲江の「おあきゴブゴブ」など悲しい話ではあるが、永遠にゆるぎない愛の雄叫びは消えることはあるまい。浦々に建てられている魚鱗塔には、命をもらって生きる漁民の祈りと、金子みすずの詩が重なる。木浦の山奥でひっそりと眠る女郎墓は、「からゆきさんの歴史」と重なり、決して風化させてはならな

いと思う。「史談」とはいみじくも名付けたものである。

はじめにこんなことを書いたのは、佐伯史談会の基礎を築いてこられた故羽柴弘先生の、「佐伯史談会の課題」（第九十二号・昭和四十九年一月参照）という論考に出会ったからである。先生は、「郷土の歴史を研究することを立て前として来たものの、それに地理・民俗風習・郷土芸能・文化財・観光資源の探訪など（中略）生物・絵画・文芸・建築・自然・生産業なども研究の対象としたい」と述べられ、ガリ版刷の蓄積と合わせて、先駆的な視野の広さ確かさに触発されたのである。

この正月、市商工会青年部の方から、「市のまち起こしに取り組んでいるが、佐伯のことをあまり知らない。郷土の歴史を学んで、実のある活動を展開したい」と言われた。また、「この池の石碑の長い文は何と書いているのか」「市のガイドに、もう少し歴史に裏づけられた案内をしたい」との声も聞かれた。地域の歴史や文化に根ざしたまちづくり・地域おこしの強い息吹が感じられる。

今日までも、市の歴史教室への援助、文化財の保護活用、各種資料の解説等へ参画してきたが、地域に貢献するわが

史談会の役割は益々高まってくるだろう。

そこで、会員が受け持つ専門的分野を再度確認してリストをつくり、照会を受けた時は、いつでも誰かが対応できる態勢をつくっておくのはどうだろう。勿論、個人々の意向は尊重されるが、市民各層とのつながりを深めることによって、さらに開かれた史談会として発展していくのではないだろうか。例えば歴史教室、郷土の歴史探索の手がかりと手法がつかめるような内容を用意する。複数の講師とアシスタントで濃密な現地研修の企画を提案してみたい。

次に会の中核をなす「佐伯史談」。広い分野にわたり中味ある研究調査の成果は、一義的には会員対象になるのは当然であるが、それにしても難解な記述も見受けられる。市民の方からみると、なおさらとっつきにくいだろう。原文はそのままで読み下し文にはルビと語の意味をつけ、解説をやさしく記述すれば、うんと読みやすくなると思う。価値の高い内容をわかり易い言葉で表現するならば、もっとすぐれた論文になるだろう。

更に、連載ものの長い論文は、制作費のハードルもあるが、終了後に、一冊の研究書として発刊（有料でよい）されないかと、欲深い希望が湧いてくる。

それに、現在図書館の一室を借りている事務所の書棚には、「佐伯史談」をはじめ会員がまとめた資料、他からの寄贈された資料や歴史関係の図書の置き場が無い程多くなっている。書棚の補充も必要だが、失われたら二度と手に入らないこれらの資料をどう分類整理して活用しやすいようにしたらよいか、会員各位の知恵をお借りしたい。

「こんな資料がないか」と問い合わせがあれば、「あ、ここにこんなものがあるよ」とか、「ここにはないが、あの方が持っているよ」と、答えられるようになりたいものである。どなたでも気軽に史談会か図書館を訪ねて、郷土に関する資料や研究の手がかりが得られるようになれば喜ばれることだろう。

これからも会員が個人的に或はグループでまとめられた研究調査物なども是非寄贈してほしい。私たちの積み重ねた学習活動や研究成果を会員・史談会に止めることなく、佐伯市民の共有財産として公開され活用されることを願って止まない。